

# 都市大坂における問屋の取引と存在形態 —油問屋・種物問屋に即して—

大学院文学研究科 後期博士課程 島崎未央

## I 本研究の課題

灯油（夜間照明用・生活必需品）と、原料の種物（菜種・綿実）の流通構造を解明すること

幕府の関心と統制 巨大消費地・江戸へ供給する油値段を下げる／大坂への一極集荷

種物を公認の絞油屋へ安く供給

・先行研究 幕藩制市場構造論 [津田秀夫「封建経済政策の展開と市場構造」1961]

幕藩体制の解体過程を論じる素材として、油の統制政策に注目、変遷過程を検討

・幕府官僚の市場調査書

「大坂の特権商人の独占をいかに切り崩し、油の値段を引き下げるか」という官僚の意識の影響

・大坂で集荷を担う出油屋（後述）の由緒書を検討

史料批判に難点

⇒結果、《都市特権商人》vs それに対置しうる村方の《在郷商人》、という対立構図に終始

流通にかかわる諸集団の個別性・特殊性は捨象

★流通史研究の視角から、商品の特性に即して、流通の具体像を解明

…流通の担い手（問屋、仲買、小売商人、船、産地）の内部構造

取り結ばれる取引関係と利害関係

・一橋大学付属図書館蔵・幸田文庫「米屋本文書」…出油屋・米屋又兵衛家／幕末期の写本類が主

18cの勘定帳（取引記録）／株仲間名前帳（構成員の名簿）の写し／由緒書・裁判記録の写しなど ※繰り返し記録

※史料の作成主体、作成時期、史料作成の意図、内容の信憑性に留意する必要

⇒大坂と泉州を対象に、油・種物の流通構造を担い手の視点から分析

幕府の流通政策と社会的実態の相互規定性を解明

## II 出油屋仲間の構造と性格

・明和7年、株仲間として公認（13軒） 固定的な7軒（残り6株は仲間持ちで貸し株に）

・江戸口油問屋・京口油問屋、両替商との重なり

…同一経営内での兼帯は回避しつつ、分家・別家として密接な関係を保つ

⇒「油問屋」の“一体性”

※京口油問屋が在方油の直請をすると、出油屋へ加入（出店扱い）させる

・油仲買の加入を強く忌避 …双方で援用される「在方絞油屋の論理」

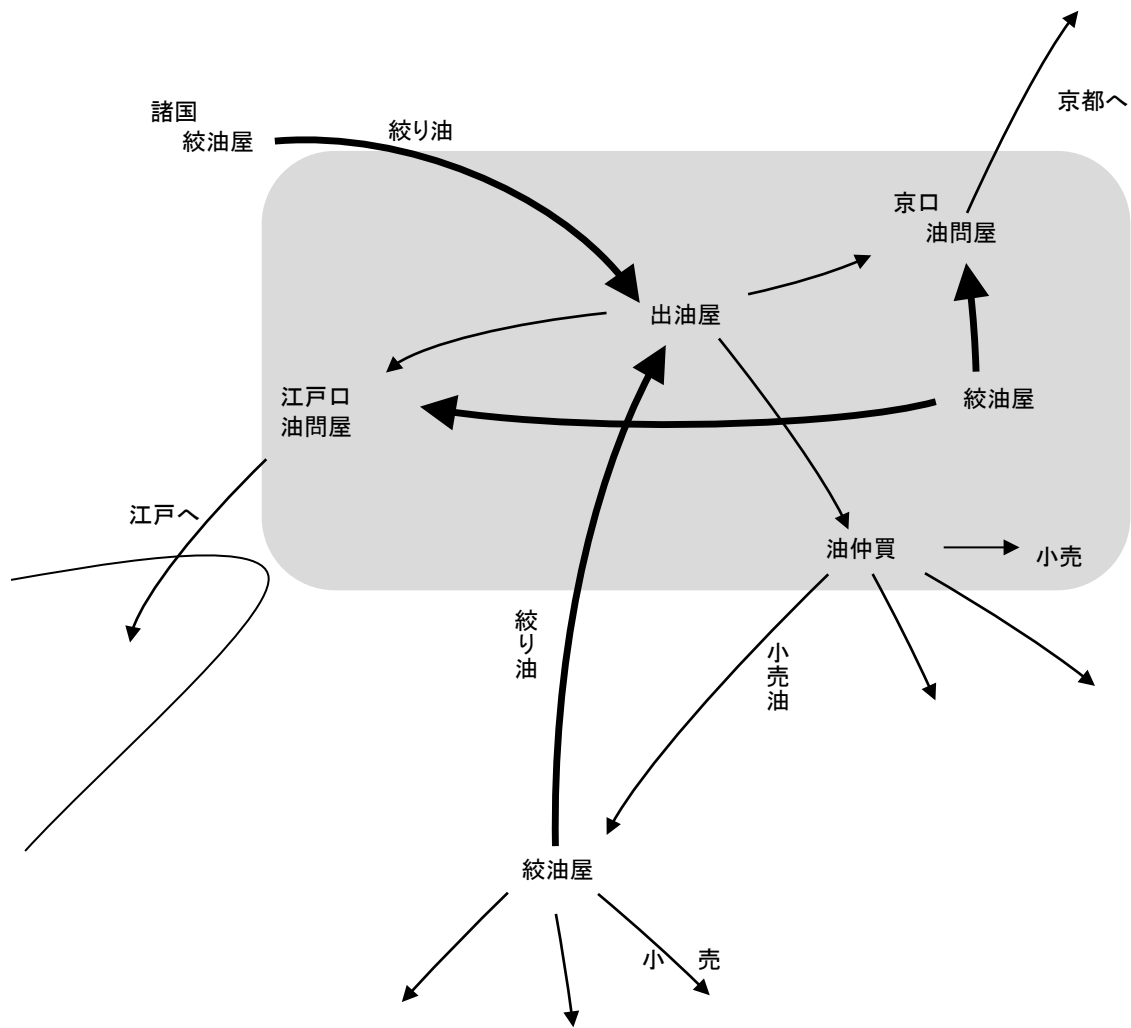
×在方油屋の利害を代弁する大坂資本の登場 ◎利害貫徹のために在方油屋の論理を援用

⇒「買い」の局面（品質検査・計量とそれに基づく口銭収取）の独占が出油屋仲間のアイデンティティ。

生産者（絞油屋）、媒介者（油仲買や江戸口・京口問屋）、買い手（江戸・京都など）との摩擦の焦点。

…《都市特権商人》vs 《在郷商人》の対立構図に収斂しえない分業構造の中で、丁寧に描き直す必要。

…（史料のもつ可能性と限界を視野に入れつつ）…



**図3 明和七年令下の油流通経路**

※出油屋の中には京口油問屋・江戸口油問屋を兼ねる者もいたと思われるが、省略した。

出典：和泉市の歴史3 池田編「池田谷の歴史と開発」、354頁の図を加工・一部修正。